

グループで考えた会話を基に音楽の仕組みを生かして、 まとまりのある音楽をつくる学習

～3年「よびかけっこで音楽をつくろう」の実践を通して～

谷 口 彩

I はじめに

全体研究の2年次テーマ「深い学びを実現する学習づくり」を受け、音楽科の2年次研究では、「思いや意図をもって学び合い、知識・技能を習得することで、豊かに音楽表現する力を育む学習」とテーマを設定し、研究を進めた。豊かに音楽表現する力を育むためには、自分の思いや意図を表現するための知識や技能を習得することが大切である。ここで言う「知識」とは、児童一人一人が体を動かしたり、音楽に対する感性などを働かせたりしながら感じ取り理解したものであり、「技能」とは、上手下手で表されるような単なる技能ではなく、あくまでも自分の思いや意図を表現するために必要な技能のことである。

音楽科の授業づくりにおいては、音や音楽を通したコミュニケーションによって、一人では気付かなかったことに気付いたり、みんなで作る音楽が深まっていったりする喜びを感じ、楽しみながら音楽表現する学習を考えていく必要がある。知識や技能の習得には、機械的な訓練や練習を積み重ねるだけではなく、実感を伴って理解したり、友達との学び合いの中で習得したりすることが重要だと考えた。



奏法を見合う児童の姿

II 研究の目的と方法

本研究の目的は、児童の「豊かに音楽表現する力」を高めるための効果的な手立てについて明らかにすることである。そのために、以下の2つの視点から、授業実践「よびかけっこで音楽をつくろう」における児童の様子について分析する。

- ① 知識・技能を習得する学び合いの手立て
 - ② 豊かに音楽表現する力を育むためのグループ形態の工夫
- なお、「よびかけっこで音楽をつくろう」の概要は以下のとおりである。

1 題材名 「よびかけっこで音楽をつくろう」

2 題材の目標

「呼びかけとこたえ」の仕組みを生かして、まとまりのある音楽をつくったり、その面白さやよさを感じ取りながら楽曲を味わって聴いたりすることができる。

3 題材の概要 A表現(3)イ B鑑賞イ

本題材は、「呼びかけとこたえ」の仕組みを生かしてまとまりのある音楽をつくったり、その仕組みから生まれる音楽のよさや面白さを味わって聴いたりすることをねらいとしている。「みんなで世界に一つだけの音楽をつくるのが楽しい」と楽しさを見いだしながら学習する児童が多い反面、「うまくいかないこともある」と、音楽づくりを難しく捉えている児童が数名いる実態から、苦手意識をもつことなく学習を進めるには、自分たちの思いや意図を表現するために必要な知識や技能を習得し、音楽づくりに生かすことが重要だと考えた。

まず、グループで考えた会話を基にリズムをつくり、そのリズムを組み合わせたたり、楽器で音色を工夫したりしながら音楽をつくった。グループ内で考えを共有したり、つくった音楽を視覚化したりできるように、ホワイトボードを用いた。楽器をリコーダー、ウッドブロック、トライアングルの3つに絞り、それぞれの特性を生かして、自分たちの音楽に合うように音色を組み合わせたたり、奏法を探ったりした。自分たちの会話に合う音楽をつくるために、見合う活動を取り入れたり、何度も試したりする時間を大切にしたりした。

Ⅲ 結果と考察

1 知識・技能を習得する学び合いの手立て

(1) 結果

本題材では、自分たちの想いや意図に合わせて「音楽の仕組みを用いて音楽をつくる」技能を習得したり、「音色の響きやそれらの組み合わせの特徴」に気付いたりするように構想した。

授業の導入時には、リズム遊びやリズムのリレーなど、拍感を伴いながらリズムに親しめる時間を設定した。教師のリズムを様々な条件に変化させながら「まねっこ」して様々なリズムを刻んだり、ペアやグループをつかって友達のリズムを「かえっこ」したり、学級を大きなグループに分けて、リズムや人数を「重ねっこ」したりする経験を積むことで、児童は楽しみながら様々なリズムに親しんでいた。グループでの音楽づくりに入る前には、学級全体で8小節分の会話をつくり、リズムにかえて手拍子で演奏した。言葉がリズムに変わる面白さや、会話が音楽になることで、「おはよう。」→「おはよう。」と「まねっこ」したり、人数を増やして音を「重ねっこ」したりするなど、「呼びかけとこたえ」の音楽の仕組みに気付くことができた。

授業の展開時には、自分たちで会話を考えることにより、「『あそぼう』と言われたら、みんな『いいよ』と返したくなった。」「『何食べる?』と聞かれて、食べたいものを考えていた時、食べ物によってリズムが変わるから楽しかった。」と「呼びかけとこたえ」の仕組みのよさに気付きながら音楽をつくっていた。「1人から3人に人数を増やしたら強弱が付いていい感じがする。」と盛り上がりをつくったり、「始まりの方は1人ずつ追いかけてこするようにして、最後は全員で『やったー』で終わると思い通りの音楽になった。」と曲の始まりや終わりを意識して全体のまとまりを考えたりして、様々な演奏を試す姿が見られた。

題材を通して、ウッドブロック、トライアングル、リコーダーの3種類の楽器を用いて音楽づくりに取り組んだ。楽器ごとの音色の響きを感じ取ったり、音色の組み合わせによって音楽のもつ雰囲気や変化したりすることに気付かせるために、教師による模範演奏を聴かせた。演奏を聴き、気付いたことや感じたことを話し合うことで、奏法によって表現を工夫できることや音色が変化することに気付いていた。その気付きを生かしながら、児童はグループの友達と話し合ったり試したりしながら、言葉に合う楽器を選んだり、3種類の楽器の音色を組み合わせたりしていた。「そ〜だね。」「い〜いよ。」など言葉が伸びる長音ではトライアングルを用いて演奏したり、「すぐつくるね。」「おんせんいこう。」と一小節の中に入る言葉が長い場合にはウッドブロックやリコーダーを用いて演奏したりするグループが多く見られた。言葉のイントネーションを表現するために、ウッドブロックの左右どちらから演奏したらよいかを聴き合ったり、リコーダーのシとラの音を何度も試したりしていた。トライアングルは、言葉によっては表現が難しい場合もあるが、手で音を止めたり伸ばしたりする奏法を工夫して表現していた。一つの楽器を一人で演奏するよさに加えて、同じリズムで違う楽器の音色を重ねたり、同じ楽器で人数を増やしたりすることで、表現の工夫ができることに気付き、自分たちの音楽づくりに生かしていた。

(2) 考察

音楽的な知識・技能を習得する学び合いの手立てとして、友達と様々なリズムに親しんでから、「会話」を基に音楽をつくったり、音色の響きを感じ取ってから、教師の模範演奏を基に気付きを交流したりすることは、児童が音楽づくりに生かしたい知識や技能を習得することに効果的であったと考える。

右の写真から分かるように、このグループは、まず始めにつくった「会話」に新たな言葉を足している。「ただいま」と言ったら、「おかえり」と返ってくる「会話」の流れ、音楽で言う「呼びかけとこたえ」の仕組みを加えることによ

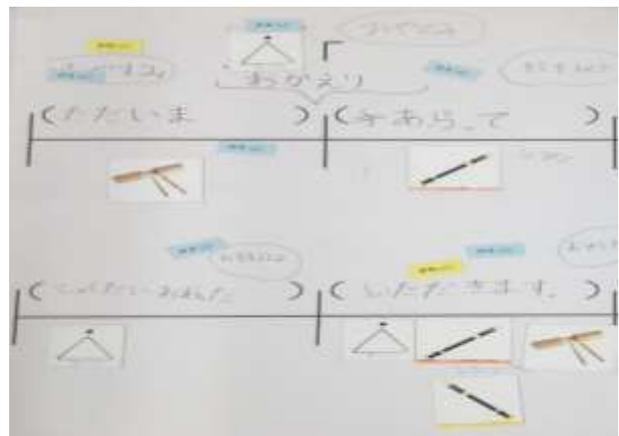


写真1 児童の思いや意図が記された楽譜

て、リズム遊びで習得した「まねっこ」が活かされ、より音楽が面白くなることに気付いていた。前半は一つ一つの楽器の音色を生かして、あえて音を重ねていないが、後半はみんなで音を重ねて、楽しい会話の様子を表現している。あえて特徴の異なる3種類の楽器を提示することで、それぞれの楽器の特徴に迫り、そのよさを存分に引き出そうと様々な奏法を試すことにつながったと考える。

音楽づくりとなると、一から自分たちで作らなくてはならないと難しさを感じる場合が多いが、音楽には曲を構成する仕組みがあることや、それぞれの楽器の特性、奏法による音色の違いに気付くと「できそうだ。」という気持ちが湧いてくる。本実践では、「会話」を糸口に進めたが、今後は「イメージ」や「リズム」など、「会話」以外の手立てでも音楽づくりに取り組めるように、実践を積み重ねていきたい。

2 豊かに音楽表現する力を育むためのグループ形態の工夫

(1) 結果

本題材でグループ形態の工夫をしたことは2つある。1つ目は、グループを編成する際に人数を考慮し、学習リーダーを配置したことである。学習リーダーとなって話し合いを進める児童をグループに配置したことで、学習リーダーを中心にお互いの意見を出し合ったり、グループで出た意見を基に様々な奏法を試したりすることができ、話し合いが円滑に進むグループが多かった。また、グループの人数を4人にしたことで、グループ内の意思の疎通が図りやすく、自分の意見が反映されたり、お互いの考えのよさを認めたりすることができたと考える。以上の手立てによって、3種類の楽器をどう使うのがよいかを決める際には、「リコーダーで追いかけてこすると、他の楽器よりも本当に会話しているみたいになったから、ぼくたちはリコーダーを二つにしたよ。」「この言葉のリズムには、トライアングルが一番合うから選んだよ。」などと、グループの友達と色々な楽器や奏法を試して、お互いの意見を交流し、全員が納得して音楽をつくる姿が見られた。

2つ目は、音楽づくりの後半に、交流グループを設定し、お互いの演奏を「聴き合う活動」を設定したことである。「どんな会話に聴こえるか。」「自分たちの音楽との違いは何か。」「よさや面白さは何か。」の3点を聴き合う際の視点として押さえてから交流した。聴き終えた後には、「トライアングルを手で止めると、本当に話しているみたいに聴こえたよ。」「たくさんまねっこが使われていたよ。」と、自分たちにはない表現や奏法に気付き、表現の幅を広げていた。全体発表の前時に行ったので、自分たちの演奏を「今よりも、もっとよくしたい。」「何かヒントになるような音や音楽を見付けたい。」と友達の演奏を食い入るように見て、聴いている姿が見られた。



写真2 聴き合う場面の様子

(2) 考察

人数を考慮してグループを編成したり、交流グループを設定して「聴き合う活動」をしたりすることは、豊かに音楽表現するために効果的であったと考える。

グループ活動のよさは、一人ではできない表現のよさを体験したり、自分だけでは考えも付かなかった表現の工夫に気付いたりすることである。一人一人の思いや意図が表れ、自分たちの作りたい音や音楽を求めて、様々な奏法を試したり、そのよさや面白さを感じ合ったりしながら、互いに学び合う時間を多く生み出すことが何よりも大切である。題材や学習内容に応じて学習形態を工夫し、友達同士で教え合ったり、アドバイスし合ったりしながら、豊かに音楽表現できる環境を整えることが重要である。

聴き合う活動では、「どんな会話に聴こえるか」「自分たちとの違いは何か」「よさや面白さは何か」の3つの視点を基に、交流グループの演奏を聴いて、自分たちの演奏に生かす姿が見られた。

「○グループは、組合せごとに並んでいたから、息がぴったり合っていたよ。」「最後に全部重ねて終わるのがかっこよかったから、私たちもやってみたよ。」と、お互いのよかった部分を認め合い、自分たちの演奏に生かす姿が多く見られた。視点をもって交流することで、リズムや音色、奏法の工夫に着目することができていた。更に、楽器の組み合わせが同じだったり、全く異なる奏法で演奏したりしているグループと交流することで、表現の幅を広げることができると思う。学年や学習内容に応じて、グループ形態を工夫し、自分の思いや意図を表し、豊かな音楽表現につなげていくための手立てを今後も充実させていく必要がある。

IV まとめ

本研究では、児童の「豊かに音楽表現する力」を高めるための効果的な手立てについて明らかにすることを試みた。そのために、「音楽的な知識・技能を習得する学び合いの手立て」「豊かに音楽表現するためのグループ形態の工夫」の2点について、「よびかけっこで音楽をつくろう」の実践を基に論を展開した。以下に、その成果と課題を示す。



写真3 様々な奏法を試す姿

1 成果

- 音楽の仕組みや楽器の奏法についての工夫を、ただ教え込むのではなく、教師の模範演奏から気付かせることで、「自分たちの音楽づくりに生かしたい」という気持ちを高め、必要感をもって知識や技能の習得に取り組むことができた。
- 「会話」を基に音楽づくりを構想することで、児童はリズムや音色を工夫しながらグループの友達と学習を進めることができた。
- グループ形態を工夫することで、児童一人一人の思いや意図を伝え合うことが可能となり、自然と教え合ったり、何度も奏法を試したりしながら、豊かな表現につなげることができた。

2 課題

- 豊かな表現につなげる指導の手立てとして、学習内容や児童の実態に応じたグループ形態の在り方について、実践を積み重ねる必要がある。
- 音楽づくりの学習については、児童が難しさを感じることなく、思いや意図を表現できるよう、「会話」以外の手立てについても研究を進めていく必要がある。

V 参考文献

- 小学校指導要領解説 音楽編 文部科学省 平成20年8月
- 小学校指導要領解説 音楽編 文部科学省 平成29年6月
- 学習指導要領等の改善及び必要な方策について（答申） 平成28年12月
- 初等教育資料No.947「音楽科において育成を目指す資質・能力」 文部科学省
東洋館出版社 平成28年12月
- 初等教育資料No.948「学習指導要領における指導のポイント〔音楽〕」 文部科学省
東洋館出版社 平成29年1月
- 教育音楽小学校版「ここまできた！ICTを活用した最新授業」
音楽之友社 平成28年12月
- 教育音楽小学校版「[共通事項]でさがす鑑賞教材」 音楽之友社 平成29年1月
- 教育音楽小学校版「常時活動ってなに？」 音楽之友社 平成30年4月
- 小学校音楽「授業マネジメント」 中山 由美著 明治図書 平成27年9月
- 音楽の授業で大切なこと 中島 寿・高倉 弘光・平野 次郎著
東洋館出版社 平成29年6月
- 小学校 新学習指導要領 ポイント総整理 音楽 東洋館出版社 平成29年10月
- 小学校教育課程実践講座 音楽 株式会社ぎょうせい 平成30年1月